

国語教育に大きな足跡を残された“大村はま”さんが亡くなられて9年になります。

遺された多くの著作や文章には心うつものがたくさんあります。

情報コーナーにも揃えてありますので、ぜひ一度お読みください。

『心のパン屋さん～ことばの教育に生きる』よりご紹介します。

「老人って、思ってたあいもん」

まだ敬老の日が、国民の祝日に制定されていなかった頃のことになりますが、とにかくその年の老人の日は、学校がありました。私は東京中央区の文海中学校に勤めていました。二年生の担任でした。

9月15日、朝の学活で教室に行った私は、内心、うふふと笑いながら、しかし一応あらたまった調子で口を開きました。

「今日は何がなんでも、私の言うことをきくこと。おとなしくして、とにかく老人の私が心を痛めるようなことは、今日だけはしないこと……」

こう言って見渡すと、「なんのこと？」といったような顔、きょとんとした顔。

「今日は老人の日ですよ」そう言ったとたん、一ばん前にいた鈴木宗一がプイと、横を向きしました。

「先生のこと、老人って、思ってたあいもん」すると、つづいて、「いなあーいもん」「いなあーいもん」「いなあーいもん」

いたずらっぽい合唱のなかに、私は泣きたいのか笑いたいのかわからなくなっていました。

「老人の日ですよ」といったとたん、間髪をいれずとは、あのような呼吸をいうのでしょうか、きっと「先生のこと、老人って、思ってたあいもん」と返してきたのです。

老人の日、というと、何かひと言言ってみたくなる。そんな程度ではありますが、やはり一抹のさびしさ、とまではいえませんが、一すじの思いがあったといえましょか。老いをちらっと感じているような、いないような、とにかくじょうだん半分に説教めいて言ってみたい、私の心でした。それを瞬間にぴたりと受けとめて、励ましと慰めをいたずらっぽいあそびの雰囲気包んで投げ返してくれたのです。

鈴木宗一、人の心にも雰囲気にもぴたりと、さっとこたえる人、鋭くゆたかな心の持ち主でした。今、小学校の先生をしているといいます。

大村はま著『心のパン屋さん～ことばの教育に生きる』より